

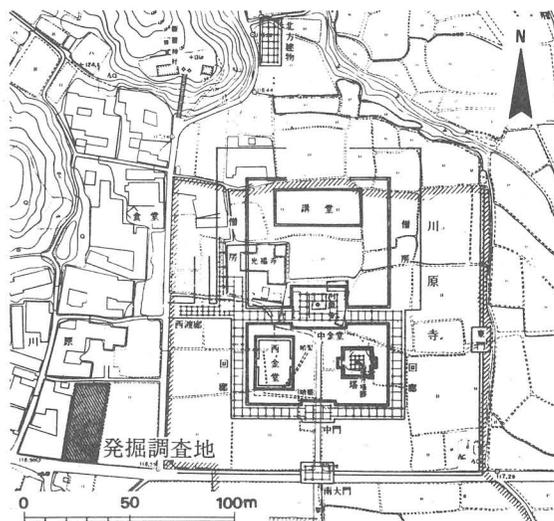
川原寺西南部の調査

(昭和54年7月～昭和54年8月)
(昭和54年12月)

この調査は、史跡川原寺跡の現状変更申請に伴う事前調査として実施した。調査地は川原寺の寺域西南部に位置し、伽藍復原整備地の西に近接した水田である。調査は南北に長い水田を南半と北半の2回に分けて行ない、全体として499㎡を調査した。調査地の基本的な土層は、上から耕土・床土・茶褐色土の順であり、調査区西半部では地表下0.4mの花崗岩霉爛土(地山)上面において遺構を検出した。調査区の東半部には沼状の落込みがあり、地表下1.4mの花崗岩霉爛土上に暗灰褐色粘土、青灰色粘土が厚く堆積する。また調査区北西部には整地土がみられた。

検出した遺構には、掘立柱建物2、土壇3、斜行大溝1、掘立柱塀1、井戸2のほか沼の西岸、南北細溝などがある。遺構は、その重複関係と伴出する遺物から4期に分かれる。

I期の遺構には東西掘立柱塀SA01がある。柱穴は一辺0.6mの方形掘形をもち、底部に柱根が残る。1間分3.0mを検出したにとどまるが、調査区域外



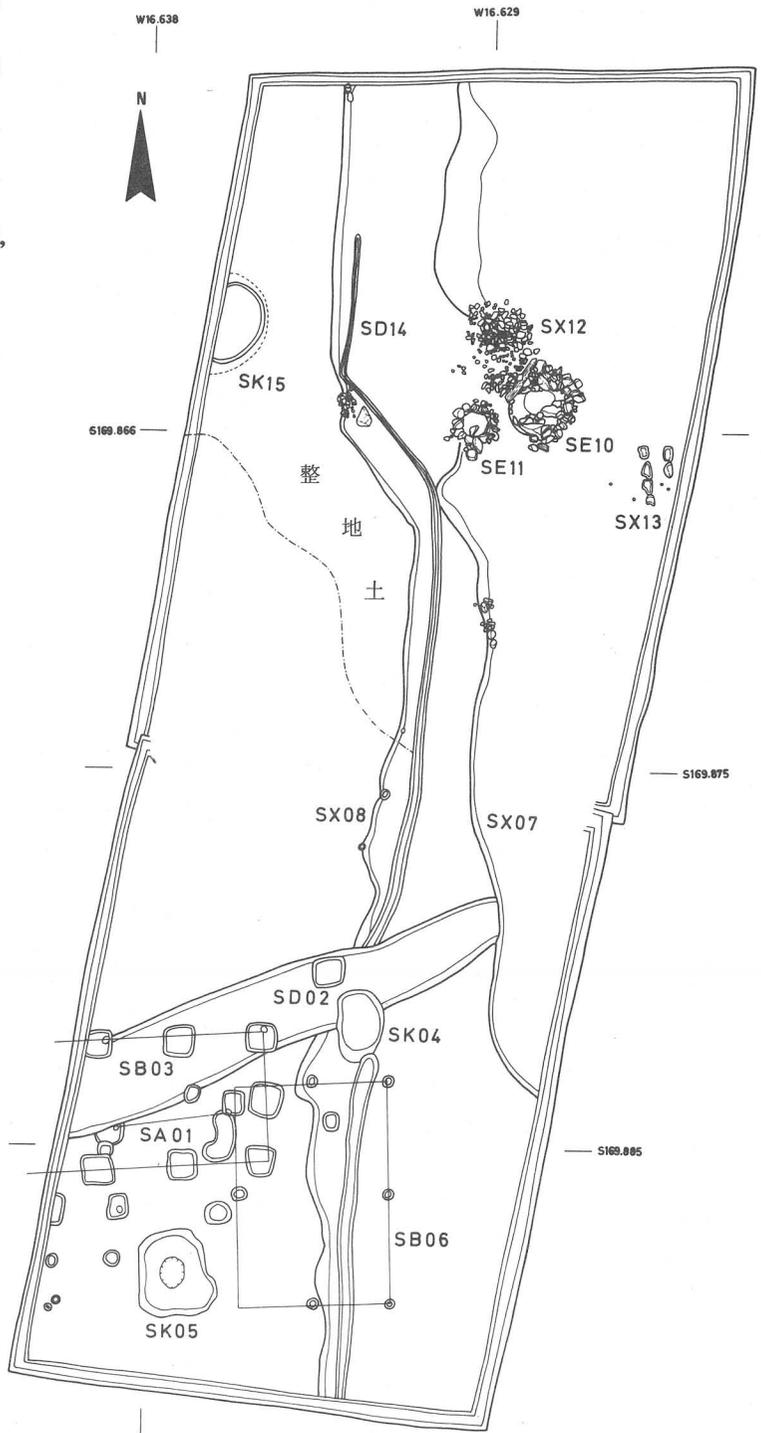
調査地位置図

西方に延びる可能性が強い。西側柱穴はII期の斜行大溝に切られている。

II期に属する斜行大溝SD02は、幅2.4m、深さ0.9mの断面U字形の素掘り溝である。埋土は3層に分かれるが、各層より7世紀第I四半期を中心とする時期の遺物が多量に出土した。

III期の遺構には、掘立柱建物SB03、土壇SK04・05がある。S

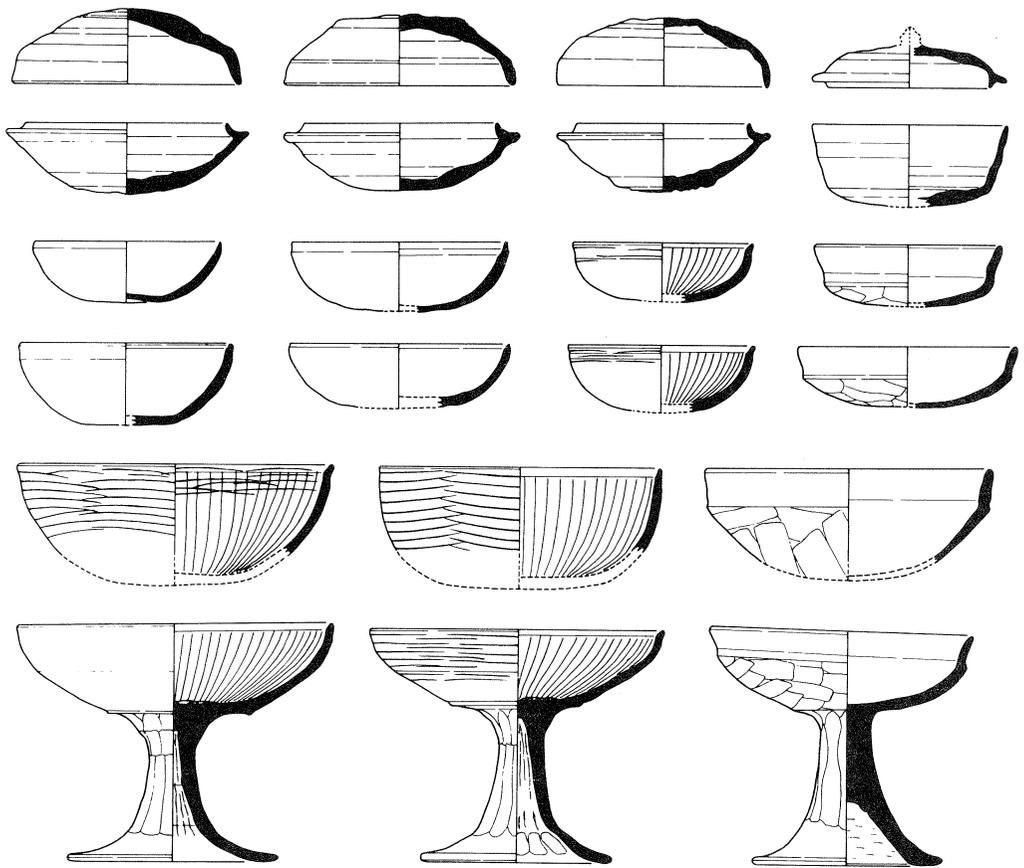
B 03は梁行2間、桁行3間以上の東西棟建物で、西妻は調査区域外に出ている。柱穴は一辺0.8m前後の方形で、いずれも0.5mの深さをもつ。柱間は桁行2.1m、梁行1.8m等間である。建物の方位は方眼方位の東で北に2°ほど振れる。北側柱はⅡ期の斜行大溝と重複し、柱穴埋土中には川原寺創建瓦が含まれている。SK04は深さ0.7mの長円形土坑で、底面上に木片が3cmの厚さで堆積していた。この土坑は斜行大溝と重複するが、斜行大溝よりも新しく、埋土に大形の瓦片を含む。SK05は一辺2.3mの隅丸方形の土坑である。底面から土師器長甕が押しつぶされた状態で出土したほか、埋土から7世紀後半期の土器



川原寺西南部調査遺構配置図 (1 : 200)

とともに、川原寺所用の重弧文軒平瓦や丸・平瓦が出土した。以上の遺構のほか、調査区北西に広がる整地がⅢ期に属するものである。整地は南で沼の西岸を埋立てるように行なわれ、北では地山を削平して盛土している。整地土は0.3～0.6 mの厚さで、暗黄褐色の山土と茶褐色土の2層からなる。整地の東端は中世の削平をうけて明確ではないが、SX08以東にも及んでいたことが確認された。整地土からは川原寺創建時の軒丸瓦完形品が出土した。なお、調査区の中央を南北に延びるSX07は、整地地業以降の沼の西岸と考えられる。

Ⅳ期の遺構には、掘立柱建物SB06、石組井戸SE10、SE11、石敷SX12、石組溝SX13、土壇SK15などがある。SB06は直径0.25 m前後の小柱穴からなる掘立柱建物で、桁行2間、梁行2間の南北棟である。柱間は桁行3.0 m、梁行2.1 m等間である。柱穴埋土に瓦器片を含む。このSB06廃絶後に、沼の西岸付近に大改修が行なわれている。すなわちSX07西方では、Ⅲ期の整地層ならびに地山を10～40 cm掘り込んで削平面を造成し、SX07東方ではこの削平面と同レベルまで沼を埋立てている。この結果、調査区域内においては沼が消滅し、新たな埋立地に石組井戸や石敷、石組溝などが構築される。SE10は径2 m、深さ1 mのすり鉢形の石組井戸である。最下段に50～60 cm大の大形の河原石を据え、その上に人頭大の円礫を掘形に沿って斜めに3～4段積み上げている。現状では積石の多くが底面上にずり落ちているが、崩落した石の中には方形に面を取った大理石や凝灰岩、榛原石がまじる。また積石の間には補強材として瓦や炭化材が使用されているところから、川原寺の焼亡後に廃材の一部を転用して構築された可能性が高い。井戸の埋土から出土した瓦器は、白石太郎氏編年のⅡ-2型式に相当し、12世紀後半代に位置付けられるものである。SE11はSE10の西に隣接して設けられた内径0.7 m、深さ1.2 mの円形の石組井戸である。径20～30 cm大の円礫を垂直に6～7段積み上げて構築している。遺物の出土がなく時期は不明であるが、SE11の構築に伴ってSE10の西壁の一部が破壊されているところから、SE10→SE11という先後関係が認められる。これらの石組井戸の北には、小礫を雑然と敷いた石敷SX12が存在する。このSX12とSE10の接する部分には、小礫が井戸へ落下するのを防ぐために



SD 02 出土土器実測図

丸太材が置かれておりSX 12がSE 10に伴う施設であることが判る。石敷中からは瓦器，青磁，白磁とともに，川原寺所用の四重弧文軒平瓦や平安前期の均整唐草文軒平瓦が出土した。SX 13はSE 10の南東2 mで検出した石組溝と考えられる遺構で，長さ1.6 mを検出した。石組井戸に関連する排水施設の可能性があるが，南北に接続する溝状遺構は検出できなかった。土壇SK 15は調査区北西の整地土上面において検出した。この土壇の西半部は調査区域外にあるが，径約2 mの円形土壇になるものと考えられる。深さは2.1 mに達し，壁は底面から内側に湾曲するように立ち上がる。埋土は人為的に埋戻した状態を示しており，井戸枠を抜きとって一気に埋めた井戸跡の可能性はある。埋土から青磁碗が出土している。IV期の遺構にはこのほかに，SX 08に沿って走る南北

細溝SD14，調査区西半の地山上面で検出した多くの斜行細溝がある。

今回の調査によって，川原寺主要伽藍西方の寺域の様子が一部明らかになった。以下では昭和32年以來の川原寺発掘調査成果に照らして，今回検出した遺構の性格を簡単にまとめておきたい。

今回の調査地は，川原寺西方に位置する三角形の丘陵の東南裾にあたり，調査区西半では地表下0.4 mで花崗岩霉爛土の地山が現れ，安定した地盤を形成している。この地山上から検出されたⅠ期の東西堀やⅡ期の斜行大溝は，川原宮造営以前の遺構である。溝の出土遺物には7世紀第Ⅰ四半期に比定される須恵器・土師器やフイゴ羽口，ルツボ，鉄滓等があり，周辺の丘陵裾部に川原宮造営以前の集落，工房が営まれたことを示している。これに対して調査区の東半からは沼の西岸が検出された。この沼の上限は必ずしも明確ではないが，斜行大溝SD02を沼への導水路とみると，7世紀第Ⅰ四半期には既に沼が成立していたことになり，川原寺伽藍敷地の下層に広がる沼との関連が新たな問題となる。沼の下限に関しては，沼上に構築された第Ⅳ期の石組井戸，石敷等の年代から，遅くとも12世紀後半には沼が消滅したようである。このように川原寺の存続期間中に，寺域内の一部に沼が存在した事実を得たことは新しい知見であった。次に第Ⅲ期の遺構であるが，これらの遺構から出土する瓦が川原寺創建瓦に限定されることから，川原寺創建以降の遺構と考えられる。特に掘立柱建物SB03は川原寺の付属屋と考えられる建物である。調査区北西部にみられた整地も同様に付属屋建設のためになされた基礎地業と考えられ，寺域西方に川原寺の寺院経済を支える諸施設が存在することが明らかになった。最後に第Ⅳ期の遺構であるが，石組井戸SE10の構築材の一部には，川原寺焼失時の廃材と考えられる部材が転用されていた。この井戸の埋土から出土した瓦器は，12世紀後半代に位置付けられるものであり，『玉葉』に記された建久二年（1191）川原寺焼失の記事との関連が注目される。

以上のように，今回の調査によって寺域の西方地域が7世紀以降，川原寺の変遷と密接な関係をもちつつ展開した地域であることが明らかになった。川原寺主要伽藍周辺部の今後の調査が期待される。